

# Vision

## 有効な研究費配分システムを求めて： まずはNepotismを排斥しよう

群馬大学医学部  
城 所 良 明

我が国の科学研究費は、その額、件数ともに上昇しつつある。世界のそれぞれの分野の一流誌に、日本の研究室で行われた研究の成果が多く発表されるようになってきた。我々の研究費も、私が大学院の学生だった頃に比べるとずいぶん豊かになった。もはや研究費が少ないから良い研究ができないという言い訳は通じなくなった。また今こそ研究費をどのように配分したら最も効率良く、我が国における研究が推進できるかを真剣に考えるべき時が来たと思う。現在文部科学省の科学研究費はそれぞれの学会から会員の投票によって選ばれた代表によって審査され、申請された研究計画のメリットに応じて配分されている。しかしこの審査の過程が現在は審査員の考えに白紙委任されていて、不透明感が残っている。アメリカで行われているように、各審査員が委員会の中で自分の見解を説明する機会があると、この点が改善されるかも知れないが、狭い日本の中でこれ以上透明度を上げることは審査員にとって、あまり居心地の良いものではなくなる可能性がある。この辺で日本の精神風土にあった研究費の配分の仕方を創出するべきではなかろうか。どのようなシステムを作っても、それを運営していく人達の考え方によって良くも悪くもなる。まずは倫理感の養成が必要である。倫理規定は罰則を伴わないために無用であるという考えもあるかも知れないが、大多数の人がそれに納得して自己の規範として取り入

れてくれば極めて有効であろう。

まず審査の過程からNepotism（身内主義）を排斥することによってずいぶん公平感が増すのではないか。これは必ずしも審査員だけの問題ではなく、若い研究者の中にも自分の身内が助けられることを期待する甘えがあるように見うける。自分のボスが審査員になれば、自分の研究費申請が採択される可能性が多くなると考えて、審査員として自分のボスに投票するというようなことは、あってはならないことである。

人材は極めて貴重な資源である。現在世界中で科学の振興が叫ばれている中で、我が国においては有能な人材はかならず登用する必要がある。裏を返せば、たとえ身内であっても無能な者に研究費を配分する余裕などないはずである。

次に研究費の有効な利用を各研究者自身が心がける必要がある。言うまでもなく研究費は国税によってまかなわれているのである。高価な研究機器が、使い手がないままに埃をかぶっているということがないようにしなければならない。研究は研究費がなければ遂行できないが、研究費が沢山あれば良い研究ができるわけではない。高価な研究機器もそれ自体が研究をするわけではない。十分な計画のもとに、機器の有効利用をはからなければならない。これも倫理規定である。そうすることを押しつけると百害が生ずる。

以上倫理面でも提言をしたが、最後に1つだけ

具体的な提言をしたい。それは現在の文部科学省の基盤研究（B）のようなカテゴリーを拡充することが望ましい。それぞれの研究者個人の発想に基づいた独創性の高い研究計画を遂行し易い環境を作る必要がある。アメリカのNIHの研究費にR01というカテゴリーがあり、これは個々の研究者が自分のイニシアティブで研究を推進するもので、現在年間6000ぐらい新たな研究計画を支えている。研究者が自らの発想で、自らの責任のもとに研究を遂行するものである。多くの場合新しい発想が若い頭脳から生まれることを考えると、このカテゴリーの研究費を拡充することはどうし

ても必要である。大型の研究費配分は能率が悪く、チームの中での若い研究者の独立性を保持しにくい。またいくつかあるチームの間での交流が少なく普段は別々に研究をしていて、研究費申請の時だけ一緒になっている感がある。またこのような大型研究費による研究体制はボスを作る温床になり、独創性をさまたげる。

以上勝手な事をとりとめもなく述べましたが、要は有効な研究費の配分は困難ではあるが、皆で知恵をしぼるのに充分値する課題であることを強調したい。